

映像制作プロジェクト番外編

『馬頭琴と出会う』制作準備編

馬頭琴 美炎インタビュー（1）

馬頭琴。モンゴル語では「モリンホール」と言います。

楽器の先端にお馬さんの彫刻があって、私の楽器はその下に 龍の顔も彫刻されています。弦は二本しかないんですけども、実際には100本以上の、もともとは馬の尻尾（しっぽ）の毛を束ねています。そして、楽器自体を両足でぐっと挟むので、足の力もちょうど必要です。

もうひとつ面白いのは、普通、弦楽器というのは 指の腹で 弦の上から押さえて音程を変えますが、馬頭琴は 爪の付け根の上の部分で 弦の横からこの様にぐーっと押して音程を変えます。内側の弦を押さえる時は、小指は下をくぐって横から押さえます。

< 「スーホの白い馬」演奏① 馬頭琴（美炎） >

馬頭琴 美炎インタビュー（2）

私が馬頭琴に初めて出会ったのは、18歳の頃だったんですけども、もともと子どもの時にバイオリンを習っていました。音楽は子どもの時身近にあったので、わりとあたり前の存在という感じで、自分が音楽家になろうとは思っていなかったんですけども。

ほんとに小さい頃から馬が大好きで、モンゴルにはいつか絶対に行きたいなと思っていました。そんな時に馬頭琴に出会って、あー、本当にお馬さんが付いていて、バイオリンと同じ弓を使う楽器なんだということで、これはもう自分の楽器だ、と思って、絶対に上手くなる、と思って始めました。

モンゴルの先生というのは、その当時、手取り足取り教えてくれないんですね。弾いて見せて、その場で真似をして、その繰り返しで覚えていきます。

まず、モンゴルの先生が、この馬頭琴という楽器を上手に弾けるようになるには、馬に上手に乗れるようにならないと弾ける様にならないと言われたので、私は子どもの時から馬が大好きだったので、絶対草原で馬に乗りたいな、と思って、たくさんたくさん馬に乗りました。

モンゴルの音楽の中には、馬のリズムの曲が結構あるんですけども、馬のリズムの曲を弾いていると、本当に草原で馬に乗って走った時のことがすごく思い出されて、実際に自分が馬に乗っている、そういう気分に とってもなれる楽器だな、と思います。

< 「スーホの白い馬」演奏② 馬頭琴（美炎）＋カホンとシンバル（前田仁） >

馬頭琴 美炎インタビュー（3）

馬頭琴の音色は、例えば 草原のチェロ という風な言われ方をしますが、そういうちょっと西洋的な音も出れば、かなり深みのある、ちょっとざらっとした音色だったり、深かったり。そういう特徴なのは、弦が一本ではなく100本くらいの毛の束になっている事ですね。

馬頭琴を弾いていると、その音色の幅の中に自分の心がぐーっと入って行くような、そういう心地良さ、その音自体に自分の身を委ねられているような心地良さというのがあります。

< 「スーホの白い馬」演奏③ 馬頭琴（美炎）＋カホンとシンバル（前田仁） >